

7.2.3.2 教育・研究指導のあり方

＜2003年度に設定した目標＞

1. 充実した指導教員による個別的な研究指導の確立
2. 研究プロジェクトへの参加の促進
3. 社会人、外国人留学生に対する十分な教育研究指導体制の確立
4. 連携大学院における体系的な研究指導の確立

【評価項目 6-2-3】 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

(必須要素) 社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

(現状の説明)

社会人、外国人留学生に対して教育課程編成上特別な配慮はしていない。教育研究指導については、組織的取り組みはないが、個々の指導教授が責任をもって指導に当たっている。外国人留学生への講義は、通常の学生と共通に日本語で行っているが、研究指導面では英語によるコミュニケーションにより補っている。外国人の博士学位取得者は、2003年度2名、2004年度1名である。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

社会人、外国人留学生に対する教育は、講義における日本語の理解に問題が残るが、指導教員により適切に指導がなされており、これまで大きな問題は生じていない。

特に改善すべき大きな問題はないが、より充実した指導体制を目指す。

【評価項目 6-2-4】 研究指導等（学生の研究活動への支援を含む）

(必須要素) 教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

(必須要素) 学生に対する履修指導の適切性

(必須要素) 指導教員による個別的な研究指導の充実度

(選択要素) 複数指導制を採っている場合における教育研究指導責任の明確化

(選択要素) 教員間、学生間及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるための措置の適切性

(選択要素) 研究分野や指導教員にかかる学生からの変更希望への対処方策

(選択要素) 才能豊かな人材を発掘し、その才能に適した研究機関等に送り込むなどを可能ならしめるような研究指導体制の整備状況

(選択要素) 学生に対し、研究プロジェクトへの参加を促すための配慮の適切性

(選択要素) 学生に対し、各種論文集及びその他の公的刊行物への執筆を促すための方途の適切性

(現状の説明)

大学院における教育・研究指導は、多くは内部進学者であるため、通例学部4年次の卒業研究の指導と連続している（「評価項目 6-1-1」参照）。

学生に対する全般的な履修指導は、大学院入学時に大学院教務学生主任が行っている。さらに個々の指導教員が入学時のみならず、その後も適宜細かい履修指導を行っている。指導を徹底するため、履修登録に際しては、指導教員の承認を求めている。教育課程の展開及び学位論文の作成等を通じた教育・研究指導は個々の指導教員にまかされている。特に、生命科学専攻では、指導教員が指定する科目の履修を義務づけている。学位論文の作

成は、指導教員によって個別にきめ細かく指導されており、その内容は公開の発表会で口頭発表することが義務付けられている。発表会では、毎年活発な質疑応答がみられ、充実した内容の修士論文、博士論文の作成がなされている。また、学生によって多数の研究成果が学会発表されている。

教員間、学生及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるために理工学部講演会（2004年度合計35回）、種々のシンポジウム（国際シンポジウムを含む）、フォーラム、セミナー（文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業によるセンターや本学の特定プロジェクト研究センターなどが主催、2004年度合計10回）が開催されている。

私立大学学術研究高度化推進事業や特定プロジェクト研究センターは学生に対し、研究プロジェクトへの参加を促すための大変よい機会となっている。後期課程の学生については、リサーチ・アシスタントとして採用（採用者は、2004年度に在籍する学生25名中16名）することにより、研究プロジェクトの重要な担い手として活躍する場が与えられている。

（点検・評価の結果および改善の具体的方策）

目標とした各指導教員による充実した研究指導は、学会活動や学位取得の状況を見ると高い成果を挙げていると判断できる。特に、後期課程の学生の大方は研究プロジェクトに参加し、学術論文を英文雑誌に発表しており、先端的研究に重要な位置を占めていることが伺える。社会人、外国人留学生についても、毎年学位取得者を出しており、適切な個別指導が行われていると評価できる。

学生に対する履修指導については、大学院教務学生主任による全般的な履修指導に加えて、各指導教員が個々の学生の履修状況をチェックしており、きめ細かい履修指導がなされている。

教員間、学生間及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるための措置、学生に対し研究プロジェクトへの参加を促すための配慮は、学外者によるセミナーや研究プロジェクトにかかわる研究室間の情報交換などを通して精力的に行われており、充実した成果を挙げている。

特に改善すべき大きな問題はない。

【評価項目 6-2-5】 「連携大学院」における研究指導等

（選択要素）「連携大学院」における体系的な研究指導等を確保するための方途の適切性

（現状の説明）

2004年1月に独立行政法人理化学研究所と「関西学院大学大学院の教育及び研究への協力に関する協定書」を取り交わし、「連携大学院」として協力関係を締結した。これにより、理化学研究所の研究者（2004年度1名）を客員教員として任用し、生命科学専攻の大学院生の主指導教員としている。主指導教員とともに理工学研究科専任教員による副指導教員を置き、体系的な研究指導を確保するよう努めている。2004年度は、1名の学生がこの制度によって、理化学研究所からの客員教員の指導を受けている。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

連携大学院は、生命科学専攻の設置にともなって導入されたものであり、その成果を評価するには時期尚早であり、今後検証していくことが必要である。

現時点で、特に改善すべき大きな問題はない。

7.2.3.3 教育方法のあり方

<2003年度に設定した目標>

1. 少人数クラスによる緊密な教育指導

【評価項目 6-3-1】 授業形態と授業方法の関係

(必須要素) 授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

(必須要素) マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

(必須要素) 「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

(現状の説明)

授業形態や授業方法は各教員の判断にまかされている。授業は少人数クラスで行われている。特に研究指導は、先端的な研究活動の実践を通してマンツーマンで行われる。研究指導の成果として、レフェリー付英語学術雑誌への論文発表や学会発表などが多数ある(「7.2.5 研究活動と研究環境」参照)。

マルチメディアを活用した教育は、パワーポイントを用いた授業、ネットワークを介したパワーポイント資料の提供、eメールによる質問の受付などが一部の教員により行われている。また、研究室内のゼミなどでは、マルチメディアを利用した学生の発表も行われている。

「遠隔授業」は理工学研究科では実施されていない。

(点検・評価の結果および改善の具体的方策)

授業形態と授業方法については適切、妥当と判断できる。少人数で質問、議論等も活発に行われており、その教育指導上の有効性は高いと言える。マルチメディアを活用して有効な授業もあれば、別段それを利用する必要のないものもある。現状はそれぞれの授業に適して利用されていると判断できる。特に問題はない。

7.2.3.4 教育成果のあり方

<2003年度に設定した目標>

1. 教育効果の測定法の確立

2. 後期課程修了者の研究者、高度専門職への就職の促進